慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	レオン・ワルラス 手塚寿郎氏訳 純粋経済学要論（上巻）
Sub Title	
Author	永田, 清
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1933
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.27, No.8 (1933. 8) ,p.1125(91)- 1129(95)
JaLC DOI	10.14991/001.19330801-0091
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19330801-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

レオン・ワルラス
手塚壽郎氏譯

純粹經濟學要論（上卷）

永田清

レオン・ワルラスの理論經濟學上に於ける功績は、之を大別して、二とすることが出來る。一はメンガア、ジェヴンズと並んで限界利用學說を創唱したること、他は經濟現象の說明に最も正しき意味の數學的方法を導入したることである。

前者に於ける學問的價値の吟味は姑く措き、茲に謂ふ最も正しき意味に於ける數學的方法とは何か。其は、一言にして蔽へば、經濟現象間に存する mutuelle dépendance の認識である。從つて單なる現象の數量化若しくは數學的記號の使用は、この意味に於ける數學的方法ではない。從來、經濟學研究に數學的方法を使用するものを總稱して數理學派と呼んで居るが、此は言葉の嚴密性を欠くものである。數學を使用すると謂ふ事實だけでは、何等方法論上の本質的意義がない。即ち便宜手段としての數學の使用は理論經濟學上の根本問題にはならぬ。正しき意味の數理經濟學とは、經濟現象の函數的理解、數學的論理の使用を意味するものである。

然らば、斯る函數的理解とは何か。單純因果關係による現象の理解は、因子の原子論的游離と其の靜止的反復を前提とする。然るに動的過程に在り、且つ、全體的連繫のもとに於ける社會的因子は、以上の如き單純なる現象生

起の理解を排除する。而して、固定より發展へ、原子より全體への擴大が、此等因子間の相關々係を必然的のものとするのである。例へばYがXの函數なるとき、其Yの一々の點はXの函數に依て定められる進行の原理を表す。これを示すものが微分係數であつて、其はYなる變數の生成發展の原理をXの函數を用ひて規定するものに外ならない。函數の表す變數Yの進行の理由は、其個々の點に於ける進行の方法をdy/dxに由り表さしめる。變數Yは微分係數dy/dxの示す生成の原理を荷ふ數値の綜合に由て生成せられるのである。

斯る相關關係に於ける理解は、思性の形式として、社會現象の全體性を豫想する。この意味から謂へば、數理經濟學は方法論上の普遍主義に接近する。併し乍ら、此方法は、單に思性の形式として部分に對する全體の先行を認めただけであつて、其の說明の重心は依然として部分概念としての因子に存する。即ち此場合、社會現象としての一因子は、全體間に於ける函數關係の從屬變數として理解されるのである。謂はゞ、數學的方法論は、論理上の發展として、個別的因果論と普遍主義との中間に位するものと謂へるであらう。

斯る論理上の重點は、社會現象の全體的發展をそのまゝに理解することではなくて、發展過程に於ける一點の科學的明示を意味する。即ち平衡狀態の說明は斯る靜止的理解であつて、この平衡は全體的關係に於ける一因子若しくは數個因子の變動によつて再び他の平衡へ移動する。茲に社會現象の發展過程に於ける理解がある。

學說史的に謂へば、此平衡理論は、クウルノオ、デュプュイ等の部分平衡論よりワルラス、パレエトオの一般平衡論へ發展して居る。クウルノオが制限せられた意味に於ける數理經濟學の建設者たることは異論がない。彼れは、「需要は價格の函數である」との命題のもとに、相互依存の關係を函數論を以て詳細に說明して居る。然しこの說明は部分的平衡の範圍を出でぬ。一般的な平衡理論の說明はワルラス、パレエトオに俟たねばならぬのである。即ちワルラスがクウルノオより受けた遺產は、彼れ自ら言明する通り、函數計算の使用原理である（手塚敎授譯、本文五頁、原著一九〇〇年版序文八頁）。

ワルラスに依て創めて完成された一般平衡理論は最も正しき意味の數理經濟學である。この故に、彼れは所謂ローザンヌ學派を建設することが出來た。而してこの意味に於けるワルラスの主著は茲に紹介する「純粹經濟學要論」である。

ワルラス經濟學の體系は三部に大別される。第一部はこゝに謂ふ純粹經濟學、第二部は應用經濟學——社會的富の生產に關する理論、第三部は社會經濟學——社會的富の分配に關する理論である。而して斯る三部作中最も主要なる部門が第一部であることは異論少きところであらう。この一部を補ふ文獻として "Théorie mathématique de la richesse sociale" 1883（早川三代治氏譯レオン・ワルラアス純粹經濟學入門）があることも注意を要する。

「純粹經濟學要論」には二個の重要なる理論的內容が盛られてある。一はラルテ（手塚敎授の譯語に從へば稀少性）の理念を以てする限界利用說と他は一般平衡論の說明である。抑〻經濟學上に於ける價値論は、價値なる現象を生產の過程から說明するか、消費の範圍から分析するかに依て各〻異つた結論が生ずる（拙稿「價値論管見」本誌二十五卷一號參照）。今假に後者をとるとすれば、人間の心理に其根據を求めることは當然であつて、所謂心理的經濟價値說なる範疇が生じた。而してこの範疇の中、漠然たる心理的評價より進んで、之に限界概念を附與し、限界利用の理念を交換價値決定の原因としたことは、兎に角、限界利用說のもつ學說史上の功績であつた。ワルラスのラルテ論は、この意味から謂つて、一個の價値論を構成して居る。

一般平衡論はワルラスの與へた最も大なる功績である。こゝで彼れは連續的因果法則を全然棄てて了つた。一切

の因子は、相關關係によつて、同時に問題とされ、同時に決定せられる。斯る經濟現象の相互依存關係の認識が、事實上、ロオザンヌ學派建設の由來となつた。

前述のラルテ論と此の一般平衡論とは、勿論、兩立せぬ。論理上の形式から謂つても、前者は連續的一元的原因論であり、後者は一切因子の同時的決定を意味するからである。然らば此「要論」に於ける矛盾は如何う解決さるべきか。ワルラスの直接後繼者パレエトオは斯う謂つて居る――「價値の一個原因があるに違ひないとの輿論が極めて强かつた爲め、ワルラスさえもこの點から全然脫却し得なかつたと謂ふことは、充分注意を要する。却つて彼れは、一定の場合に於ける平衡の諸條件を示すことに依つて、斯る價値論の誤謬を指摘するに與て力があつたのである」(Pareto, Manuel d'économie politique IIme éd. p. 246)。ワルラスがラルテ論を左程重要視して居なかつたと謂ふことは、一八七四年五月二十三日附ジエヴンス宛書簡に於ても、之を窺ふことが出來る。即ち、ジエヴンスが十二日附書簡で限界利用說は既に早く自己創唱にかゝることを申し送つたとき、彼れは、一往、自分も亦獨立にかゝる結論に到達したことを述べ、然る後、極めて淡白な態度でジエヴンスの要求する priorité を認めて居る(Walras, Théorie mathématique de la richesse sociale 1883. p. 26-31. Correspondance entre M. Jevons et M. Walras 及び Letters and Journal of W. I. Jevons. 1886 參照)。

パレエトオ以下ローザンヌ學派に屬する人々は、皆この平衡論を擴充した。この學派的發展が、「要論」の重要點を最もよく指示して居る。今日の嚴格なる意味に於ける數理經濟學派はロオザンヌ學派の別名と謂つても宜い。モレエが數理經濟學者に對立する意味に於て文字的經濟學者（Les économistes litteraires）と謂ふ名辭を用ひて居るのも單なる比喩以上の論理的重要性をもつものである。(J. Moret. L'emploi des mathématiques en économie politique. 1915. p. 113 參照)。

以上の意味に於て、ワルラスの「純粹經濟學要論」は當然邦譯さるべき一文獻であつた。手塚教授の努力は、此方面に於ける吾が理論經濟學の發展を刺戟すること極めて大であらう。因に、私は曾てロオザンヌ學派に關する二捆論文を本誌に寄せたことがある(「ロオザンヌ學派創設者レオン・ワルラス」――二十一卷十二號。「價値論と平衡論」――二十二卷十號)。本書理解の一助ともならうか。

（一九三三・七・一八稿）